

# 反障害通信

17. 4. 3

63号

## 森友学園問題

この問題は元々国有地の不正取得問題として出てきました。

で、テレビで出てくるコメンテーターのひとたちで、政争の具にしないで、この問題を国有地の不正取得に絞って議論していくべきだという話をしているひとがいます。そもそもそんな発言をするひとはどちらかというとな保守派のひとですが、追及する側の立場で考えても、確かに、お金の不正問題は分かりやすく、内閣支持率を低下させていることから、そこに絞った方が分かりやすいのかも知れません。

ですが、そもそもこの問題は、安倍首相が国会答弁で「すばらしい教育理念の学園」と言ったのですが、数々の問題を起こしていたことが発覚し（註1）、そののからみで大きな問題になっていたのです。わたしはこちらも、批判すべき大切な問題だと思っています。日本会議こそが戦争とファシズムの道を進む勢力で、差別主義的な性格が如実に表れていることです。

安倍政治はダブルスタンダードで、保守政治としての側面として、財界の支持をとりつける経済政策アベノミクスの推進、これは新自由主義的グローバリゼーションとリンクして、1%のひとの99%のひとへの経済的支配というところで進めてきた政治です。ダブルスタンダードにして保守派の支持をとりつけ、もう一方の基準（スタンダード）が、憲法改正ということまで含んで戦争とファシズムへの道を推進しようという極右の性格です。そこで、「日本会議」という秘密主義集団とつながりの中で、お友達になっていて、そこでのつながりの関係で、大阪知事をつながりも含めて、官僚たちが忖度して、いろいろな便宜を図ったというところで、土地取得になったという話です。ですから、その「日本会議」つながりを切り離すと、土地取得の不正の刑事訴訟というところにもってしかないと、決着が付きません。それは、ゴミの問題で、自らゴミをどこからかもって来て埋めたというところの詐欺事件の疑いが指摘されています（註2）。そこで、ひとりひとりが死んでいるということも指摘されています。これは新たな証言者を捜し出して、刑事事件化するしかありません。

もうひとつは、安倍首相が寄付をしたという問題です。政治家には献金は禁止されていると思います。これを夫人が渡すとき「安倍晋三からです」と言って渡しているとのことで、これは刑事訴追されることです。安倍首相は「そのような事実はない」と言っていますが、「ないということは悪魔の証明でなしえない」とかも言っているのですが、少なくとも、偽証をしないかぎり、ないということを証明できる方法があります。それは昭恵夫人を証人喚問することと、そしてわざわざ籠池元理事長が「人払いをして、お金を渡した」と言っているのに、自民党の議員から「昭恵さんはそのような性格ではない」と言ってい

るので、「総理夫人付」の役人を証人喚問に出せばいいのです。

アベ首相は、昭恵夫人が名誉校長になっていたことを、「しつこく言ってきたから」とまで言いだしています。証人喚問での発言でいろいろ出てきた事実を、籠池元理事長を「うそつきだ」とか言いだし、昭恵夫人の秘書的に行動していたひとの文書を個人がやったこととして、とかげの尻尾切りを果たそうとしてします。ですが、そもそもこの学園は、日本会議の日本会議による、日本会議のための学校作りとしてやってきたことで、自分達のおごりから何でもやれると勘違いして、役所を巻き込み、やらかした失態なのです。そのことを明らかにしていかなければなりません。

アベ首相は「水戸黄門の印籠であるまいし、役人が動くわけがない」とか、「役人は付度しない」とか言っています。しかし、そもそも自らそんな話を出すこと自体に、「印籠—付度」政治が示されているのではないのでしょうか。そして、「民間人と一国の首相のいうことのどちらを信じるのか」とか言いつつ(そもそもオリンピック誘致の際の「アンダーコントロール」発言などで、ウソつきで世界的に有名になったひとを誰が信じるのでしょうか?)、自民党が「私人」の証人喚問には応じられないと言っていたのに、総理の名誉を守るためと称して、籠池証人喚問に応じたのは、それこそ、総理の名誉—威信が、「印籠—付度」として働くことを示したのではないのでしょうか。

私人と公人の話をしていたのですが、籠池証人喚問で「私人」を証人喚問したのだから、その議論を自ら消したのですが、そもそも安倍昭恵さんは私人か公人かということは議論になっても、「内閣総理大臣夫人安倍昭恵」を私人だと言うならば、なぜ肩書きをつけたのかという問題になるはずです。そして、「総理に伝えます」とはっきり発言したら、もう総理の代理出席の公人以外のなにものでもないでしょう。

アベ政治の手法は数を頼りにして強引に押し切り、そこで支持率が落ちて、選挙までの冷却期間をおき、そこでバラマキとか、人気取り政策を出し(たいてい、中身のない大うその誇大キャッチフレーズなのですが)、選挙の時には支持率を取り戻すというやり方です。それを同じパターンで繰り返しています。何回か繰り返すと、学習して支持率や選挙の際の議席も減るのではないかと思えるのですが、どうして同じことが繰り返されるのか、ということをごきちんと考えねばなりません。

そこで、支持してしまっている「国民が悪い」—「国民の責任」とかいう批判が起き、また、「投票しないのは支持していることと同じ」ということで、投票行動を呼びかけたりしています。それは一面的には正しいのですが、それだけでは片面的とらえ返しです。

「どうせ、誰がやっても政治は変わらない」という政治不信が広くとらえているから、そうなるのです。なぜ、そんなところに陥っていったのかとのとらえ返しこそが重要なのです。

民進党の前原さんが(色んな思惑もあってですが)、民進党は政権奪取したときの総括が必要だといっています。公約をことごとく実現し得ず、違反していった中で、投げ出してしまった最後の責任者が、ちゃんと総括もしないまま幹事長をやっています。更に、「野党は共闘」と言っても、アベを引ずり降ろすことが出来るだけです。民進党中心の連立政権ができるとしたら、今のままでは、また同じ崩壊を繰り返し、より大きな失望の中で、政治不信がましていくだけです。

もうひとつは、アベ政治批判をしているひとたちから、「社会は変わらない」ということが言われていることがあります。なぜ、そういうことばをいうひとが出てくるのか、それは、民衆の意識にも広がっています。「中国・北朝鮮脅威論」の宣伝がベースにあって「戦争法」の成立にもっていったということも押さえておかねばなりません。わたしは運動の基本的スタイルとして、「運動には相互批判が必要で、そして批判は自己批判から」ということが必要だと思っています。ここでいう総括には、社会を変えようとする運動の総体の総括も含まれます。よく、それは外国で起きたことだから、またそれは一部の集団が起こしたことだからと切り捨てるひとがいるのですが、ひとつの思想の中で、そのつながりと切断ということを鮮明にしつつ、自分たちのなかにもそのような問題を抱えていないのか、というとらえ返しが必要です。民衆の中の運動（「市民運動」）の中で対立を繰り返してきた、そしてまだ対立的なことが総括・解消できていない中で、どうして、大きな運動のうねりを作りだせるのでしょうか？

運動における自己批判から新しい運動に踏み込んでいく作業をネグレクトしていたからこそ、このような事態になっていったという自己批判が必要なのだと思います。わたしはこのことを反差別ということから切り込んでいきたいと「「反差別原論」の断章」という形で作業を開始しています。状況は厳しく、一刻も猶予を許さないところまでおいこまれているのですが、運動の総括なしには同じ繰り返しになっていきます。いまこそ、いろいろな観点からの作業をと提起します。

#### 註 1

- ① 「教育勅語」を取り入れた教育をしていること。「教育勅語」自体が明治憲法に則った教育で明らかな憲法違反の教育です。稲田防衛大臣が「基本は正しい」とか言っていたり、追及する野党の議員も「良いところもあるとしても・・・」と言っていたりしていますが、儒教精神の家族観や国家—国民観自体が差別的だと指摘できます。
- ② 教育基本法違反。前文に「日本国憲法の精神に則り」とあるので、①の指摘と重複します。8条2項の「法律に定める学校は特定の政党を支持し、又はそれに反対するための政治教育、その他の活動をしてはならない。」という条項に「安倍首相がんばれ」とか言わせたりするのは違反しています。
- ③ トイレを我慢させる、失禁したオムツを持ち帰らせる、園児を突き飛ばすなどの幼児虐待
- ④ ヘイトクライム的なことを言って、在日の生徒を追い出したという話があがっています。
- ⑤ 「発達障害はしつけの問題」とかいう社会的に形成されている認識に反することを言って、教育者が持つ必要のある基本的認識を欠落させ、「特別支援教育」対象になる生徒を集め、しかも補助金を取得した後に辞めさせたという補助金不正取得問題が指摘されています。

#### 註 2

役人たちが圧力を受けて動いたとかいう意見がでているのですが、わたしはこのゴミ問題というのは、むしろ役人サイドから出てきたアイデアでないかと思っています。まさに、「印籠—村度政治」ではないかと。(み)

情況への提言詞(8)

### 「まずいでしょ」

弁護士が自分が出廷した裁判のこと忘れてたらずいでしょ  
その上に代理人の名前を貸しただけと言ってたら、もっとまずいでしょ  
そのひとが防衛大臣をやったら、ひとの命に関わることで、最悪にまずいでしょ

一国の首相が、オリンピックの誘致のために「アンダーコントロール」と言って、東電の社員に、何を根拠に言ったのかと、官邸に問い合わせられたら、まずいでしょ

震災の「節目の挨拶」として、「原発事故」の文言を外し、自分たちが推薦し当選した福島県知事から「事故は進行形」と指摘されたらまずいでしょ

収束しているということでオリンピックをそのまま開いたらまずいでしょ

福島でオリンピックの競技を開こうというのも、もっとまずいでしょ

オリンピックのためと共謀罪を作ろうというのも、それならオリンピックを返上しようという意見が出てきて、まずいでしょ

南スーダンで戦闘行為と現地の自衛隊員が書いているのを、勝手に武力衝突と改竄したら、解釈改憲とリンクして、まずいでしょ

支持率対策のため、選挙のためにせっかく「英断」として南スーダンから撤退させると表明したのに、「時期が来たから撤退させる」と言ったらまずいでしょ

せっかく撤退を決めたのに、5月まで先延ばしして、その間に死者がでたら、もっと批判を受けて、まずいでしょ

森友学園問題で逆ギレして、「印象操作」など言ってたら、「やましいことがあるからだ」という印象になってまずいでしょ

とかげの尻尾切りとか、圧力をかけられたとか言われているのに、KKK的秘蔵主義のカルト集団「日本会議」のことを口に出したらまずいでしょ

共謀罪を「テロ等準備罪」とせっかく看板を書き換えたのに、「テロ」という言葉が入ってなかったのはまずいでしょ

それで慌てて文字を入れても、ごまかしだと分かって余計まずいでしょ

一連のことで、ごまかしやうそを重ねていたら、特定秘蔵保護法や共謀罪の真意がばれてまずいでしょ

韓国で、まずいことを重ねて朴大統領が大統領を降ろされ裁判にかけられそうなのだから、そこに自分の将来を重ねて、はやく辞めないと、平成の最大の「政治犯罪人」になってまずいでしょ

情況への提言詞(9)

## 印籠一付度（そんたく）政治

「内閣総理大臣（夫人）」の印籠突き出す首相夫妻  
官僚、与党はマスコミ巻き込み付度政治  
総理の名誉を守ると「私人」を証人喚問  
総理の名誉一権威は印籠ではないの

「内閣総理大臣夫人」を「私人」と言い張る  
SPつける「私人」はいるの  
官僚を秘書に使う「私人」はいるの  
「私人」と言い張るなら「内閣総理大臣夫人」の肩書き使う？  
「私人」ならば夫の名誉のために証人喚問に応じる？

仲良く進めていた教育勅語の学校作り  
「日本会議」の友を裏切り、新たに始める「道德教育」  
「道德教育」の反面教師の手本はアベ政治

維新の議員は「ハンゴをかけた」と言った  
ものの見事なオウンゴール

「印籠」「付度」も総理のことば  
付度するスタッフから教わったことば？  
印籠一付度政治が露呈したオウンゴール

「付度」にちゃんとフリガナふっておいた？  
「すんど」と読み間違えないように

ああ、「印籠一付度」の「裸の王様」と  
それを支える恥さらしの政治

## 読書メモ

障害学の立岩さんの本の第三次的集中学習に入る予定だったのですが、森友事件がおきて、アベ政治のむちゃくちゃさに腹を立て、FBで情報収集や分析などをしていて、いろいろむちゃくちゃな運動とかも出ていて、考え込んでいたりして、結局、読書がほとんどなしえませんでした。山ほど課題を抱え込んでいるのですが、あせると、余計進まなくなるので、ゆったり構えて、読み進めます。

・『現代思想 2017年1月号 特集=トランプ以後の世界』青土社 2017

「トランプ・ショック」の中で出された雑誌の特集です。とりあえず、特集だけ読みました。立岩さんの「相模原障害者殺傷事件」補遺は、『情況』のトランプ特集読後に読んで読書メモを残します。

いろんな立場から、トランプ大統領の登場をとらえています。とりわけ、アメリカに住んでいる「アメリカ人」や在米邦人のひとが書いている論攷が多いので、アメリカ政治史をマスコミ・ニュースくらいしか押さえていないわたしにはとても参考になりました。またさまざまなマイノリティや差別の問題から押さえているので、反差別論やっているわたしとしては、とても参考になりました。

ひとつひとつの論攷は資料として大切です。それについて、精細なノートを残し、対話していきたいのですが、とても今その時間がありません。ですから、簡単に印象に残ったことのメモにします。その前に、この特集を讀んでの、わたしの考えを対話的に少しまとめて書いてみます。

まず、まず新自由主義的グローバリゼーションとトランプの「保護主義的主張」との関係です。「保護主義的主張」といっても、鎖国をしようというわけではありませんし、モンロー主義的孤立主義ではありません。「アメリカ ファースト」ということで、アメリカの利害を第一に考え、その主張を押しつけるということです。これは、結局アメリカを軸にした(多国籍)企業の利益を守るということにしかありません。労働者の雇用を増やすと言っていますが、そもそもなぜ資本が海外流失したのかということをとらえていません。国際的な経済関係を知らないか、そもそも労働者の雇用を増やすというのは白人労働者の票が欲しいがためのウソだったということになります。このあたりはナチス・ドイツが国家社会主義労働者党と名乗って金持ち攻撃をして政権を握ったことと同じ構造です。アメリカの労働者の雇用を増やすと賃金が高くて、国際競争力で負けて、アメリカを軸にした企業は衰退していきます。なぜ、新自由主義的グローバリゼーションの時代になったのかという話です。

このあたりは、この特集の中で、マイケル・ハートも文を書いているのですが、グローバリゼーションということを読むときに必読書になっている、ネグリとの共著『<帝国>』の中において、ふたりは、グローバリゼーションの進行下で、国民国家の力が縮小していくというようなことを書いていました。ですが、わたしはそれはないだろうと思っていました。現実には、各国でナショナリズム的なことが大きくなっています。その答えは、ローザの「継続的本源的蓄積論」にあります。わたしはこれを差別というところからリンクさせています。資本主義は差別ということなしに、継続し得ないのです。そして、国家という共同幻想をもってしか、差別の構造を維持できないのです。だから、国民国家の力は縮小しないで、むしろ危機の時代には国家主義的なところから排外主義を煽り、そこで資本家と労働者の対立—むき出しの差別の構造を隠蔽しようとするのです。他の差別の問題にすり替えるのです。だから、トランプが国民国家として自国の労働者の権利を守るというようなことを言っているのは、結局そもそもごまかしにすぎません。それに早晚気づいて転換していくか、別のこと—戦争などを始めて破綻をごまかしていくしかないのです。わ

たしは後者の恐れが大きいと思います。トランプほど、うそ・ごまかしにまみれた政治家はいません。もうひとりいました、安倍首相です。

さて、もうひとつはポピュリズムの問題。そもそも、ポピュリズムの定義があいまいになっています。それはサンダースのことを左翼ポピュリズムという定義をして、トランプの右翼ポピュリズムと対比させている論攷がこの雑誌の中でもいくつか出てきます。わたしはそもそもポピュリズムに「大衆迎合」という訳があっているとしたら、その意味に於いて、どうも違うのではないかと思うのです。(ポピュリズムとポピュラリズムという概念で区別している論攷がでているのですが185P、わたしはこれは逆になっていると思います。ポピュラリズムは大衆に依拠するなり、大衆に分かりやすく語るというということではないかと思います。実はこれは、左翼ポピュリズム」と語られている内容で、わたしなりにとらえると、これは左翼ポピュラリズムではないかと思います。ローザ・ルクセンブルグの大衆の「自然発生的エネルギーに依拠する運動」ということにそれはリンクしていきます。)

ここで、わたしなりのポピュリズムの定義です。

まず、①大衆蔑視による大衆迎合(註1)と大衆操作

次に、②非論理性、虚偽性がそこにあること(従って、一時的になっていくこと・・・リンカーンの「少しの人々を長い間だます、多くの人々を短い間だますことはできても、多くの人々を長い間だますことはできない」という提言を想起します。)

もうひとつ書き添えます。今、トランプ・ショックに対して、よその国のことより自分の国の首相への批判からしていこうよ、と言う提起が出ています。これはよく分かりません。トランプ・ショックでいろいろ意見を言っているひとは、自分の国の首相の批判もしているからです。それに、グローバリゼーションの時代に線引きが可能なのでしょうか？まして、日米安保があり、集団的自衛権を中身にして、地球の裏側まで米軍についていくとか言っているときに、そしてアメリカのトランプの動きは決して自国に引きこもることではなく、世界の脅威になっています。そして、歴代の大統領ならば押しはしない核のボタンを押すのではないかとさえ、思えるのです。だから世界中で反トランプ動き出しているのです。他の国から干渉できないとか言っているのですが、何も選挙だけが政治行動ではありません。安保破棄なり、アメリカ商品不買運動なりやれることは多々あります。そもそも他の国の問題だという発想が分かりません。そういう発想をすること自体が、沖縄やフクシマの切り捨てを生み出してきたのではないかと思うのです。

エスタブリッシュ批判の中身として、民衆の側からの批判と大衆迎合の底にある大衆蔑視の間には乖離があります。それは労働者のための政策をと言いつつ、実はトランプが財閥だという矛盾にも通じることです。トランプは道化を演じているという話も出ています。しかも、それはポピュリズムの笑い取るという常套的なことのひとつ、差別的な笑いをもたらす、トランプのジェスチャーにも現れています。トランプが「障害者」のジャーナリストの「障害」のまねをしたということで批判を受けていることがあります。これに対して、トランプ擁護者は前からそういう仕草をしていたのだという反批判の文を書き、写真をフェイスブックでアップしているひがいて、しかも、それを「いいね」ボタンを押し、シェアしているひとも出ています。あの映像を見てまねではない、と思うひがいること

は不思議ですが、そもそも写真をみていると、話とその仕草との関連が写真では分からないのですが、あえてあくまでひとつの情報として書き置きますが、その仕草自体が、「道化」トランプが「障害者」の仕草のまねをしているのではないかと思えるのです。その写真は日本手話では（註2）、「マヒ」という手話です。その他に、トランプが話をしているときに、付けている仕草—ジェスチャーを観ていると、まさにポピュリスト（大衆蔑視—大衆迎合）だと思えるのはわたしだけでしょうか？

いつもの切り抜きメモです。

「赤い州」モンタナから見た米大統領選」130P—・・・地域差  
権威主義と脅威 139P

レイシズム 不寛容 141P

アメリカの伝統としてのPC(政治的正義 Political Correctness) 123P

経済的正義 127P

Divided State of America 分断されたアメリカ 128P

岡野八代さんの論攷 114P—・・・民主主義的良心とも言えること

トランプのロシアを巡る利権 128P

犬笛政治 155P

「「ポスト真実」社会と先住民族」166P—環境破壊と先住民族への抑圧・・・移民は白人  
総体

奨学金の回る先 163P

マイノリティの分断 163P・・・これを超えるのは差別の構造を押さえ、根源的とらえ返していくこと、それがここには書かれていない、だからアンチ・アイデンティティというような脈絡になっています

アフリカン・アメリカンの収監率と大学進学率 164P

ティーパーティー運動批判とウォール街占拠—反エスタブリッシュメント 165P

「ポピュリズムとは、(到達可能な)人民の一般意志と制度としてのデモクラシーとのズレを修正しようという動き」192P・・・ポピュリズムの定義？

「既存の体制的権力(政治的エリート)に対抗する形で、要求が制度的チャンネルを通じて実現されていないことに不満をもった負け犬的な位置にある人びとを、(例えば「チェンジ」というスローガンのような)空虚な記号(empty signifies)を媒介に等価性の連鎖(equivalent chain)によって接合しながら人民というものを構成していくような政治的論理」193P・・・ラクラウの「(左翼)ポピュリズム」の定義？

「レーニン主義的なエリート前衛主義」193P・・・エスタブリッシュメント批判との関係

註1

大衆迎合ということばは政治家の側の言動をさして、大衆の側の動きを押さえ切れていないという批判がでていましたが 177P、わたしは大衆の側の迎合(呼応)という意味でふたつとも表せると思います。「大衆」という言葉自体への違和があります。右翼ポピュリ



ズムのひとたちには違和がないとは思いますが、左翼の場合、「前衛党」的なことを止揚すると、「民衆」という言葉に変わることです。

#### 註 2

誤解のないように書いて置きますが、手話と仕草—ジェスチャーは同一ではありませんが、まねる—ジェスチャーから発生した手話単語があります。これはまさにそのような語です。

たわしの読書メモ・・・でブログ 381

#### ・『情況 2016 年 no.3—変革のための総合誌 特集:トランプ・ショック』情況出版 2016

「トランプ・ショック」の中で出された特集、もうひとつの雑誌です。

ちょっとニュアンス的に違うなと思いつつ、だいたい共鳴できる文なので、すーっと読んでしまいました。情報的にいろいろ参考になります。

矢吹晋「ディビッド・クレイバー『負債論—貨幣と暴力の 5000 年』が説くパックス・アメリカナの崩壊」が、新鮮でした。と、言っても、この著者はウォール街オキュパイを担ったひとで、アナーキズム的なところでの運動のようです。日本の場合もそうですが、アナーキズム的な運動が出てきているのですが、運動の展望のようなことが、そこから出てくるとは思えないのです。「マルクス主義」の総括と理論的深化から、マルクス派の運動を創り出す必要を感じています。

特集で、小コーナーで、田中正治さんの文がきちんと運動の方向性を出そうとしていることで、参考になります。

特集から外れるのですが、重信房子「ヒラリー・クリントンとイスラエルロビー」が参考になりました。リビアへの侵攻をリードした好戦性とアメリカにおける歴代のイスラエル寄りの政治家の中で、クリントンもトランプもそれを受け継いでいる構図がとらえられます。イスラエルロビーの暗躍が果たしてきた大きな役割がとらえられます。どっちにしても、アメリカはひどい状況になっていたのだということです。アメリカがトランプ大統領という差別主義者の登場の中で、反差別の運動がどれだけ大きいうねりを作り出せるかが、日本での運動と結びつきの中で、どう新しい社会へ向けた運動を作っていくかが問われているのだと感じています。

たわしの読書メモ・・・でブログ 382

#### ・立岩真也「相模原障害者殺傷事件」補遺」（『現代思想 2017 年 1 月号 特集=トランプ以後の世界』青土社 2017

相模原事件で立岩さんが杉田俊介さんと本をだしています。『相模原障害者殺傷事件—優生思想とヘイトクライム—』青土社 2016、その本の紹介とそこでの思いのようなことを書いた論攷です。この雑誌の連載や特集で書いた文や他の新聞やあちこちで取材を受けた中での文です。立岩節で思いを書き綴っています。本を買っているので、その本を読んで読書メモを残します。

・『季刊福祉労働 153号: 特集: 相模原・障害者施設殺傷事件-何が問われているのか』現代書館 2016

『季刊福祉労働』の最新号、相模原・障害者施設殺傷事件の特集です。

いろいろな立場から文が書かれています。言うまでもなく、読み手にとって、何が印象に残るかは違ってきます。メモということで、わたしが特に印象に残ったことを記して置きます。

太田修平「相模原障害者大量殺傷事件に思う一元療護施設入所者として」、障害連として長年活動してきた著者、サブタイトルのように「元療護施設入所者」として施設の問題性を指摘してくれています。

江端一起「夏の終わり 障害者大量殺人事件を想う—ファシズムがやってくる。いやもうやってきている。オレの中にいる。オレの中に彼はいる」は、「精神病」者の立場から、施設の職員や医療関係者に対して、怒りをアンチ的に、素直に出しています。そして内なる優生思想も突き出しています。わたしもこの事件の後、わたしもかつてとらわれていた、そして深層心理的にとらわれ続けている優生思想をとらえ返して、「わたしはひだ」というフレーズを突き出したのですが、そのようなことを突き出すと、予断や偏見を生み出すと恐れるのですが、著者は敢えてストレートに突き出しています。アンチとして揺れ動く心をとらえ返す意味は大きく、きちんと受け止めることが必要なのだと思います。

白崎朝子「『支援』が支配と暴力に変容するとき」、著者はいろいろな当事者でかつ、介助の仕事をしている立場から、この問題にショックを受けつつ、それを文にしてくれています。最近よくあちこちで文を書いているのを見えています。注目の著者のひとりです。

市野川容孝「社会的殺人—「母よ！殺すな」の先にあるもの」、優生思想批判を軸にした論攷をなしてきた著者が、ドイツと日本の比較をしてくれています。ニーチェ論が注目の論攷です。安倍首相夫人の自らの夫が行った強権政治に、責任論がないところで、融和主義的に沖縄辺野古テントに行った後にフェイスブックに出した「愛と調和」とかということばと、ナチズムのバックグラウンドになったニーチェの「愛」がわたしの中でリンクしていくのです。

池原由毅和「相模原障害者施設殺傷事件の犠牲者の方々の犠牲を無駄にしないために」の「無駄」という言葉に、いろんな意味で違和を感じてしまいました。

桜井智恵子「教育がつくる障害者排除と優生思想—モンスターは誰か」、「『構造的暴力』と正義」いうところから、教育の問題をとらえ返しています。役人のキャリアと言われるひとたちが、モンスター的存在になっていることを書いています。そのようなところからディストピア（暗黒社会）という突き出しをしています。

さて、安積遊歩さんが「社会を変える対話—優生思想を遊歩する」とシリーズを始めていて、この号で三回目、「相模原やまゆり殺傷事件」が起きて、この号でその問題を取りあげています。

この雑誌で、「季節風」というコーナーがあって、そこで取り上げられる問題は、貴重な情報源になっています。今回は「介護保険ネット」という団体とその活動のこと、「障害児」

教育における医学モデルに沿った「個別カルテ」策動、D P I 全国集会での熊本地震の際の「障害者」の避難生活についての報告が印象に残りました。

「現場からのレポート」は、伊藤書佳「ダメ、ゼッタイ。教育機会確保法案一責任を学校に行っていない人に押しつけてどうする」は、フリースクールを今の教育体系に取り込もうとする動きを批判しています。そもそもいじめや「不登校」という問題がなぜ起きるのかを押さえないで、新しい分離を生み出す動きに対する批判です。

巻末の竹端さんの連載は六回目、連載が終わった頃にまとめて、読書メモを書きます。

たわしの読書メモ・・・ブログ 384

・『季刊 福祉労働 150 号: より早期からの多様な分離が進んでいる』現代書館 2016

『季刊福祉労働』の 150 記念号。

より早期からの多様な分離が進んでいるという話。

木村一優さんの発達障害概念を押さえる論攷は医学モデル的に陥りつつも、押さえる作業としては興味深いことがあります。桜井智恵子さんの論攷は、フリースクールが差別選別教育に中に取り込まれていく状況を押さえています。柴田靖子さんの本は既に読んでいますが、2人の「障害児」と規定される子どもを育て、その環境の違いから、分離教育の問題に気付いたという話。高橋久美子さんは幼稚園・保育園で排除されていく状況を押さえています。三好正彦さんは、学童保育における「障害児」の置かれている状況について書いてくれています。名取和子さんは全国連の事務局長を務めたひと、普通学級で「障害児」を担当した経験から、能力主義管理主義の批判をしています。落合俊郎さんは外国のインクルーシヴ教育の紹介から、マルチトラックとワントラックという概念を用いながら、日本のインクルーシヴ教育の問題点を、フルインクルージョンという概念から批判しています。

記念号の目玉は座談会「日米若手障害者交流セミナー「ADA25 周年記念ツアー」で何を得たか」ではないかと思います。若手の「障害者」が、アメリカなどの外国に出掛け、そして日本において運動を担っていく中で、いろいろ吸収していく様子がとらえられます。

現場からのレポートに、斎藤縣三さんの「生活困窮者支援は何ができるか」の報告が載っています。斎藤さんの「わっぱの会」、「共同連」として動いてきた流れは、「障害者」の労働の場創出という方向にもっていき動きなのですが、「障害者」にしても「生活困窮者」にしても労働というところで、抑圧の構造に陥っていくという難しい問題があるのです。確かにそれも現実的一過渡的に必要になるのですが、わたしサイドとしては労働から仕事へというところの方向を押さえて置かなくてはならないと思うのです。

連載については、別稿でとりあげます。

たわしの読書メモ・・・ブログ 385

・『季刊福祉労働 152 号: 特集:今なぜ、成年後見制度利用促進か?』現代書館 2016

相模原事件が起きて最初に発刊された号で、編集委員会の声明が巻頭に載っています。

『季刊福祉労働』の150号記念の堀智晴さんの講演の記録も掲載されています。

特集は成年後見制度です。ラストリゾートとしての成年後見制度という問題があり、また、結局自己決定を剥奪していく制度としての批判も出ています。SDM (Supported Decision Making 支援を受ける自己決定) で、そもそも自己決定とは何かという問題も含んで、現実の利害社会の中でのトラブルが起きていくのですが、PA (パーソナルアシスタント) というところからの切り込みの提起も出ています。結局、PAというところから、介助論を煮詰め、関係性を作り上げていくというところからしか展望は見いだせないのではと思えるのですが、きちんと押さえ切れていなかったのですごく勉強になりました。

「現場からのレポート」は熊本地震のときの、熊本学園大学を拠点にした地域に開いたサポートの花田昌宣さんの報告。優生手術への国家の責任を問う運動—裁判の利光恵子さんの報告。江端一起さんの「精神病患者」の立場からの「発達障害」を巡る「公認心理師」を作る動きに対する「狂気からの反撃」が想起される「ストレートなラジカルな」批判。

連載の寄稿などは、別項で。

たわしの読書メモ・・ブログ 386

・立岩真也／杉田俊介『相模原障害者殺傷事件 —優生思想とヘイトクライム—』青土社 2016

相模原事件での共著。相模原事件関係で回を分けて『現代思想』に載せられた立岩さんの論攷三つと、同じく『現代思想』の相模原事件の特集での杉田さんの論攷と書き下ろし論攷一つ。そして2人の録り下ろし対談。「はじめに」は立岩さん、「おわりに」は杉田さんの書き下ろしです。

立岩さんは障害学関係で注目しているひと、「障害者」の存在を否定する論理への批判を論攷していて、「障害の否定性」の否定をライフワークとしているわたしにとって共通しているテーマがあります。だから、かなり追っかけ的に読んでいます。そして、学的なところでちゃんと資料整理しながら、論攷をすすめられるので、その資料を使わせてもらいながら、資料を自らが集めるという学的なことをかなりサボタージュしているわたしは、立岩さんとの対話の中で、自らの論考を深める作業をちゃっかりさせてもらっています。立岩さんの主著とも言える『私的所有論』との対話で、メールで意見交換などもしていました。それから、何冊か本を読み込んでいるのですが、積ん読している何冊かを第三次的に集中読み込みをするので、その最初に相模原事件関係の雑誌を読んで読書メモを残している流れで、それを整理・まとめるために読みました。

杉田さんは「障害児」の親の立場もありつつ、介助の活動とかをしながら、ヘイトクライムとか、性差別の問題での男性性とか、非正規雇用などの問題とかを論じているひとのようです。したがって差別の問題をいろいろ架橋しているところで、その論攷には興味深いことがあります。

さて、読書メモなので、内容的なことに具体的なメモを残すことですが、今回は杉田さんの文に新しい内容があり、心動くことがあったのですが、それよりも概観的なことで思い巡ることの方が強かったので、そのことを書いて置きます。

ふたりとも、杉田節とか立岩節とかあります。それは自らの中であつた思想や考えを、掘り下げながら、新しい思想や考えを生み出していく、いわゆる弁証法の当事者意識と第三者意識との対話に通じることがあり、わたしはそれを興味深くとらえています。わたしも他者との、そして自らの過去にもついていた、そして今も深層心理的にとらわれている自分自身の考え方—思想との対話を重ねています。

しかし、どうも、何かわたしとは波長が合わないのです。それは今回の対談にもよく表れているのですが、2人とも現在社会の枠組みの中で、ことを論じていて何か結論がでないというような絶望感に、読者も一緒に落ち込んでいくのです。そもそも、その矛盾がどういう矛盾かを分析するのに、今の社会の枠組みは変わらないという結論が先にありきで、そこで分析をしていくと、分析を掘り下げていく作業を途中で放棄してしまうこととなります。この話は、立岩さんとのやりとりの中で、立岩さんの論攷は「市場原理はなくなる」という前提で進んでいくことに対して、わたしはそもそも障害差別の土台は市場原理の中にあるというような応答をしていると、立岩さんから「(市場原理をなくす—) 社会を変え得るといふ展望を出して欲しい」といふような提起が出て来るのです。わたしは、これは政権与党が野党に対案を出せと切り返すことと同じようなことだと押さえています。対案を出す出さない以前に、何が問題かを突き詰めていく必要があるのに、その突き詰め自体も、方針を先取りして、可能性があるかどうかで、議論を深める作業を途中で止めるということはおかしいと思うのです。確かに、過去の運動の否定的あり様とその運動の現実から、展望がみえないということはあるし、過去の運動の総括から可能性を提示し、そこからもっと積極的な議論の取組をしていく必要はあると思います。そういう意味で、「反差別原論」を書き始めようとしています。しかし、立岩さんの場合は、その「市場原理はなくなる」ということを前提して進めて行くと、それは展望が見えないというより、「差別はなくなる、倫理的に押さえ込むしかない」という話にしかありません。それはマルクス派の唯物史観的なとらえ返しをするわたしからすると、むずかしい、ではなく不可能、論理破綻するとしか押さえられないのです。もちろん、「市場原理はなくなる」と言うひとにはマルクスの思想をしらないか、批判しているので、マルクスの唯物史観ということを持ち出すこと自体に拒否反応が出て来るのですが。

同じようなことが他のジャンルでも出ています。マルクス主義フェミニズムを日本に伝えた上野千鶴子さんです。マルクスが教育や家事を労働力の生産・再生産過程と押さえていることに棹さして、かなりラジカルな理論を形成し広めていたのですが、「わたしはマルクス主義者ではない」とかなり初期のころから言っていたようです。マルクスも「わたしはマルクス主義者ではない」と言っていたし、ひとの名を冠した〇〇主義というのはカリスマ性というところから、反差別的には忌避することなので、そのように言っているのか、またマルクス主義とかいうと飯の種の大学の職を得られなくなるということもあるのかなと思っていました。ですが、マルクスを捨てると、資本主義の止揚というところまで進む論考には踏み込まないとなります。ですから、上野さんの論攷はいつも途中で掘り下げが止まり、近代合理主義的差別反対にとどまってしまいます。それでは、根源的反差別にはなりません。結局、出口が見えない論攷になってしまっています。そしてとうとう、「革命は起こらない」というところで、「生活保守」を唱える若者達と共鳴しあっておしまいな

ってしまいます。果ては、難民受け入れに反対するような、反差別の立場から疑問に思わざるを得ない話にまで行って仕舞ったのです。

さて、読書メモ的なことで少し書いておきます。立岩さんが自分が共著で出したベーシックインカム関係の本について「ちなみに私は本の題名だけ見ててきとうなことを言うひとたちが誤解しているのとは異なり、ベーシックインカムの信奉者というわけではない。それは本を読んでもらえばわかる。」118-119P とあります。「信奉者ではない」ということの意味自体がよく分かりません。なんらかの意味があるから、そのことを表題にする本まで出したのだとは思いますが。そして、分からないことは書かない、問題を提起して、議論を深めるために、結論がはっきりしないままに出したということなんでしょうか？ それならば、当然結論がわからないから、いろいろ憶測を生むこととしてあります。そのひとつの憶測が「信奉者」ということではないのでしょうか？ 立岩さんは以前から、「それは以前（どこどこに）書いた、読んでください」という応答をしていて、一回は「そのような応答はまずかった」というようなことも書いていたことがあったのですが、そして立岩節を理解していないひとが文を読み違えるとか、発言をとりそこねるというようなことがたびたびおきています。そもそも運動をしているひとは誤解を生むような発言はしない、ということがあって、立岩さんの学者としての手法がなかなか理解できないのですが、そのあたりは立場の違いを押さえて、対話していくしかないのかも知れません。ただ、立岩さんの方も、他の客観主義的になっていく学者とは違うところで、問題を考えている立場ですから、「誤解を受けるような書き方や発言はしないで欲しい」、とってしまう、ひとたちの立場も考えて欲しいのです。

最初に書いたように資料を提出してくれ整理してくれている学者として、ありがたいひとなので、「使わせてもらい」更に論を進めていきたいと、「障害者」の立場で考えています。

## 映像鑑賞メモ

三上智恵監督の待望の新作が上映され、この号の編集集中に観に行き、このメモが間に合いました。

### たわしの映像鑑賞メモ 020

#### ・三上智恵監督「標的の島<sup>かじ</sup>一風かたか」2017

これは三上智恵監督、劇場ドキュメンタリー映画3作目。

「風かたか」とは風よけ・防波堤のことです。米軍軍属による20歳の女性への暴行殺人事件への抗議・追悼集会で、その女性を守れなかった無念さを、「風かたか」ということばに込めた古謝美佐子さんの唄からこの映画は始まります。まず、ここから涙。東村高江へリパッド反対の運動、宮古島・石垣島自衛隊の新たな基地建設反対運動、参議院選での井波さんの当選、そして若い人たちの沖縄伝統芸能の継承、農業の継承、伝統の織物などの継承などなど、を撮った、泣き・笑い・怒りのドキュメント映画です。

東村高江ヘリパッド反対の運動で、他の都道府県から動員された大量の機動隊員から、ごぼう抜きにされ、暴行を受ける、そして機動隊員との対峙。怒りと苦しさが伝わってきます。

エンディングロールで、最近の状況も折り込み、宮古島市議補選で、反対運動を若い子どもをだっこして活動していた女性が当選する、そして反対運動のリーダーの山城博治さんの逮捕、長期拘留に対する抗議などが流されていました。

ポレポレ東中野で上映後の三上監督のアフタートークがある回ということもあって、補助席も出て満席でした。アフタートークの中で、補選に当選した若いお母さん議員さんが、辞職勧告などを受ける中でも、そのことを乗り越えて育ち、したたかに批判の質疑をしていく様子を語ってくれていました。

状況は苦しいところへ追い込まれていくのですが、三上さんは民俗学を大学の非常勤講師として押さえているひとなので、沖縄の伝統文化等が織り込まれ、そのエネルギー、そして戦争体験・抑圧の歴史から来るしたたかさ、そして明るさ、三上監督の映画は元気を与えてくれるのです。

「反情報・コミュニケーション障害」コーナー⑨

### 手話通訳と差別語問題

以前手話の単語における差別性の問題を書きました。「差別性」と書きましたが、むしろ様態をまねて、手話の単語が作られたところで、音声言語—書記言語の世界での差別性とリンクして差別的と音声言語—書記言語の世界でとられてしまう場合もあって、手話の世界自体では差別的ではない場合もあるという話がひとつあります。もうひとつは、そもそも音声言語—書記言語の世界での差別性が手話の世界にも波及しているという問題です。これはほぼ通訳でいうと読み取り通訳（手話を音声言語に通訳）をするの方の問題です。

で、それに続いて、もうひとつ、音声言語での差別語が出てきたとき、それを手話で表す手話通訳をどうするのかの問題をここで、書き置きます。

公的な派遣でくるひとたちは、これはほぼ置き換えをしているようです。手話通訳士倫理綱領があり、その中で「手話通訳士は、すべての人々の基本的人権を尊重し、これを擁護する。」とあり、どうもこれで差別語は表さないということになっていて、それが資格とは無縁な手話通訳全体に及んでいることもあるのかもしれない。

手話の単語自体で差別的にとらえられる語を差別語として指摘し、表さなくなっているという問題があります。単語自体が消え行くということと、意味をつかんで置き換えると二通りのことが出ています。

具体的に書いてみます。「障害者」関係の手話があります。

ジェスチャー自体が差別的だからと使われなくなった手話、今、余り表さなくなっている手が落ちているというジェスチャーにつながる（様態をまねることから作られた手話）<「障害」>という単語とか、<マヒ>とかがあります。また、何も考えないという手話が「頭

空っぽ」的に見られて、そこから差別的にとらえられる場合も出てきます。もう一つの流れは、そもそも音声言語が差別語だと使われなくなった<バカ><狂う>とかいう手話があります。また、手話自体に差別性はないけれど、音声言語が差別語だから、そこで作られた手話も使われなくなったというケースがあります。例をあげておくと<ボケ>という手話です。

別のケース、民族・風習関係から作られた手話で、<アフリカ><アイヌ>、弁髪から来ている<中国>の手話です。これらは多文化主義というところで、そもそも差別的だにとらえること自体がおかしいとも言えるのですが、そもそもその文化を捨てた場合には、そしてそれを復興させようという動きがない場合には、それを表すと、その集団がそんな表現はして欲しくないと思うだろうというところでの置き換えです。たとえば、昔ヨーロッパの教科書では日本人がまだちょんまげをしているとか誤解を生むような絵とかが使われていて、たとえばわたしのアイデアですが、仮に、日本人を<ちょんまげ><ひと>で表すと、多くの日本人が不快感を持つだろうということに通じます。

これらを実際にどう表していくかについては、置き換えられた手話が出てきているので、それで表せばいいのですが、それでは通じない場合も出てきます。通訳対象者がどのようなひとかで使い分ける場合もあります。最初置き換えられた手話で通じていないと判断して、あえて差別的だと使われなくなった手話で表す場合もあります。ですが、壇上での手話で対象者がはっきりしない場合もあります。そして最近はインターネット配信されている場合もあります。また手話見ているひとの中には、他の「障害者」もいて、ジェスチャー的に見たら差別的だと感じる場合もあります。そのことは臨機応変にやっていくしかありません。

さて、問題は音声言語の世界で差別語が出てきたときに、どうするかの問題です。そもそも何が差別語なのかの問題があります。これは通訳者の感性の問題とか思想性の問題でもあるのですが、通訳者には差別と言うことがなかなか理解出来ていないで、通訳者集団で先輩からいろいろ教わってとか、放送コードのようなことを取り入れて、判断したりしています。ところで、「放送コード」とかいうと、「差別語狩り」とか反応するひとがいるのですが、そもそも「(差別が、)その差別語が、わたしを傷つけるから、そんな言葉使わないで」というところで、指摘されて使わなくなった経過があります。それに対して、そのことが誤解のようなことではない限り（なぜ誤解を生んだかの検証は必要だし、誤解をうまないようにするという必要ですが）当事者の感性を無視して、使い続けるということは反差別の立場にたつひとにはないと思います。もちろん、当事者が開き直的に使うということを規制するのはおかしいとも言い得ます。たとえば、吉田おさみという全国「精神病」者集団のひとが、『“狂気”からの反撃』というタイトルで、「狂気」の正当性というところで本を書いています。正当性というより、正負の価値観を反転させた開き直りです。それは『福祉労働』と「障害者運動」に関わっている雑誌で「キーさん革命」とか「キチガイからの反撃」という内容で文を書いたりしている「精神病」者がいることにもつながっています。これも反転させたところでの文です。これはこの雑誌が「障害者運動」に関わっているひとたちが読む、反差別ということとなりたっているところでの文の



掲載です。もし、2チャンネルでそんな文を載せたら、ネトウヨの差別的反撃で炎上します。最近はこのあたりの開き直りということで混乱している面もあります。当事者が開き直り的に使っているとは思いますが、開き直りになっていない、負価値的に使っている場面もでてくるからです。もうひとつは、開き直っているひとにはそれでいいけれど、開き直れていないひとが「傷つく」と言ってくることも考えられます。だから、開き直るところで、開き直れていないひとたちへのフォローも含めて、開き直りの言辞を使っていくことだと思います。そのあたりの混乱的情况になっているのではないかと思います。このあたりについては、別にちゃんと文を書きます。

さて、手話の世界に話を戻します。それで、そこに差別の問題がなければ、言語通訳はきちんと自分のスキルの問題として通訳すればいいのです。そういう意味では手話通訳のひとつの理想型とされる「透き通るような手話通訳」（まるで、話者が手話ではなしているかのように感じる通訳）で良いのです。また、対象者が障害をそれなりにきちんととらえて主体的に活動しているひとの場合は、当事者主体の判断に任せて、通訳者が余計な判断をしないで、通訳した方が多い場合が多いこともあります。これが言語通訳の基本で、そういう場合は差別語が出てきたら、そのままそれに合う手話言語があれば、差別的であろうと表現したらいいのです。ですが、差別の中で社会性を奪われた、情報障害・コミュニケーション障害の中で、差別に対して感情的に走り、感情的になって後で、そのことを後悔するという場面も出てきます。また、ろう者の中には、聴者側が差別的抑圧的な話をしているときに、透き通るような通訳をしてしまうと、「通訳者は仲間と思っていたのに、差別者側につくのか」という反応をするひとが出てきます。ですから、往々にして、衝突回避に動き、柔らかい表現、差別的にならない表現をしてしまうこともあります。これが差別語を使わないということにまで波及していることがあるようなのです。ですが、差別語や差別性を指摘できる主体的に動いているひとにとって、情報・コミュニケーション保障ということでは大きな問題になってしまいます。このあたりの話は、手話通訳者集団の全国手話通訳問題研究会（全通研）の学習ビデオに出てくるのですが、（おかしなことを言うてるとかいう意味で）しかめ面をしながら手話を出したりするとかいう技法もあるようです。

とにかく、手話通訳というのは、思想、とりわけ反差別の思想が要求される活動なのだと改めて感じています。

わたしは反障害論—反差別論をやっているのですが、そもそも「障害とは何か」という議論から、<「障害者」>を表す手話で、これ自体が差別的になっているのを「障害の社会モデル」の観点から、表記を変えていくという提起もしています。これについては、主題的に論じている本（『反障害原論』）と、ホームページに載せている数々文を読んでください。

## (編集後記)

- ◆前号、発刊間隔を間違えて、遅らせました。それで、「次回は隔月よりも少し早めに出して、通算隔月にします。」と書き、今回は早めに出す予定でしたが、結局、森友問題を考え、隔月刊の間隔での発刊です。
- ◆巻頭言は、森友問題です。本文中にも書きましたが、日本会議のおごりから出た失点です。それでも強引に押し切ろうとしています。「美しい国」と言っていたひとが、これほどまでに醜い姿を示すとは、信じがたいものがあります。
- ◆「提言詞」、こんなことを書いていたら、自分が嫌になってくるのですが、いろんな方法での批判をしていかななくてはと。
- ◆「読書メモ」は、今回は森友問題をいろいろ考え、情報収集していて、立岩さんの三回目の集中学習に入れませんでした。  
積読がどんどん増えています。なんとかすこしずつやっています。  
フェイスブックで、養護学校義務化の問題—発達保障論関係で議論をしました。もう、決着がついていた議論だと思っていたのですが、そんなに簡単ではないようです。新しい本を買いました。改めて批判の文を書きます。
- ◆今回の映画は前回予告した三上さんの映画、発刊が遅れたおかげで間に合いました。元気になる映画です。でも、民意を無視したあまりにもひどい弾圧です。
- ◆「「反差別原論」の断章」は、いろいろアイデアがあり書き始めていたのですが、今回は間に合いませんでした。断章という形で書き始めます。なかなかまとまった形では出せそうにありません。課題は山積、少しずつ整理していこうと思います。
- ◆次回発刊はホームページの移行の作業で遅れるかもしれません。資料になる本の整理をして、別立てで「反差別資料室」という形のホームページも作ろうとも思っています。パソコンの操作にてこずってなかなかすすみません。なんとかやっています。

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 63号」アップ(17/4/3)
- ◆ホームページのプロバイダーがサービスを停止すると予告してきています。この際思い切って大幅に改め、読書メモを参考文献として整理していく作業などをしていき、少しずつ新しいホームページに移行する準備をします。
- ◆ホームページの「本の販売—「反障害原論」を「研究会関係の書籍販売と雑誌・新聞等への投稿文」に変えて、その中に雑誌・新聞等への投稿文を掲載します。
- ◆研究会の案内文の障害関係論のところを少し書き加えました。何のことがわかりにくい文になっていますが、不備のためのとりあえずの変更、できるだけ早く分かりやすい文に書き換えます。

## 反障害－反差別研究会

### ■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に実体主義的に内自有化する形で浮かび上がる 事」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

### ■連絡先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp)

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

ホームページトップ

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/httpwww.k3.dion.ne.jp~adsnews.html.html>